

令和五年度 学力検査問題

国語

（九時二十五分～十時十五分）
（五十時間）

受検番号	第	番
------	---	---

注 意

- 1 解答用紙について
- (1) 解答用紙は一枚で、問題用紙にはさんであります。
 - (2) 係の先生の指示に従って、所定の欄二か所に受検番号を書きなさい。
 - (3) 答えはすべて解答用紙のきめられたところに、はっきりと書きなさい。
 - (4) 解答用紙は切りはなしてはいけません。
 - (5) 解答用紙の※印は集計のためのもので、解答には関係ありません。
- 2 問題用紙について
- (1) 表紙の所定の欄に受検番号を書きなさい。
 - (2) 問題は全部で五問あり、表紙を除いて十四ページです。
- 印刷のはっきりしないところは、手をあげて係の先生に聞きなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(26点)

「私」(陽菜)は音楽大学(音大)受験前に出場したコンクールで結果が出ず、打ちのめされる。思い悩むうちにまともに演奏できなくなった「私」は、姉の亜季(亜季姉)が住む奥瀬見を訪れ、オルガン製作をする工房に通うようになる。「私」はオルガン製作を通じて音楽と向き合い、亜季が金森さん、細田さん、祐子さんと組む(奥瀬見クインテット)に参加するようになる。

〈奥瀬見クインテット〉は、秋にコンサートをやることになった。

演奏会が終わったら、奥瀬見を去るつもりだ。

最近フルートを吹いても唇が震えたりはしない。そろそろ私も、自分の目標に向かって進む番だ。

「あれ？」

音楽室に近づいたところで、私は違和感を覚えた。中から、クラリネットの音が二種類聴こえてくる。しかも、片方の音は、やけに艶がある。

「よっ、亜季、陽菜。」

クラリネットの席に座る金森さんの横に、眼鏡をかけた背の低い女の子がいた。

「娘の玲だ。見学したいっていうから、つれてきた。」

「あつ、金森玲です。よろしくお願いします！」

慌てたように立ち上がり、ぺこりとお辞儀をする。幼い顔をしていて、私よりも年下のようなだ。

「玲は高一でな、音大を目指してるんだ。陽菜の話したら、一緒に演奏したいって言いだして聞かなくてな。まあ悪いが、面倒見てやってくれ。」

——音大。

どうりで、艶やかな音が聴こえてきたわけだ。

「よろしくお願いします、陽菜さん。色々教えてください。」

「あ、うん、そんな、教えることなんかないと思うけど……。」

「すぐ上手だってパパから聞きました。朝からメッチャ緊張してましたけど、頑張ります！」

玲ちゃんは人懐っこい笑顔を見せると、座って音出しをはじめた。

——上手い。

小柄な体格とは対照的に、ずしんと腹に響くような芯のある音を出す。力強いのに柔らかさもあつ、分厚い音色。細田さんも祐子さんも、玲ちゃんの美音に耳を惹かれてる。

①動悸が、高鳴る。

基礎練習を吹いているだけだが、音と音とが滑らかにつながり、きちんと作曲された音楽を聴いている気分になる。彼女の中に、生きた音楽が鳴っているからだ。どんな音を出したいのか、どんな音楽を表現したいのか、玲ちゃんの音からはぶれない意思が伝わってくる。

「じゃあ、最初は『クーブランの墓』からやりましょっか。」

音出しが終わったところで、亜季姉が言った。

一曲目、プレリユード。

隣に座る細田さんが、両手の指を動かしてかちやかちやとキーを動かしている。プレリユードはオーボエの難曲として有名な曲で、冒頭から延々とソロが続く。単に指が動けばいいのではなく、速い※パッセージの中で水が流れるような繊細さも表現しなければならぬ。

「オーケー。いつでもいいよ。」

細田さんの準備ができたところで、私は楽器を構え、ブレスを取って合図を出した。オーボエのソロがはじまる。

細田さんは、器用な奏者ではない。ゆったりとしたメロディーを歌い込ませると絶品なのだけれど、この曲のように技巧的なパッセージを吹かせるとかかなり雲行きが怪しくなる。

でも、今日の細田さんは、安定していた。難しい楽譜に苦戦してはいるものの、音楽の流れを滞らせずにすいすいと前に進んでいく。こんなに細密な演奏ができたんだと、私は少し驚いた。いや。

——玲ちゃんがいるからだ。

② 演奏の途中で、私は気づいた。冒頭から、オーボエとクラリネットの掛け合いが延々と続く。玲ちゃんは精密機械のように正確にテンポをキープして、アンサンブルの土台をしっかりと支えている。対話相手が安定しているから、細田さんも安心して吹けているのだ。

いまアンサンブルの中心にあるのは、金森玲という安定した船だった。クラリネットのソロ。

それまで裏方に隠れていた玲ちゃんの音が、一瞬でソリストの音になった。音色が一気に艶やかさを増し、フレーズを見事に歌い上げる。〈奥瀬見クインテット〉が、彼女の色に染まった。

次は、私のソロだ。私は息を肺の深いところまで吸い込み、長いフレーズに備えた。

——あ。

「……おっ？　ちょっと止めよう。」

亜季姉が言葉挟み、演奏が止まった。せつかくいい流れで進んでいた音楽は、宙に消えてしまう。私は背もたれに身体を預けた。

「ごめんなさい。拍を間違えて、入れませんでした。」

「まあ、そういうこともあるよ。あたしもミスりまくっちゃってごめんなさい。もう一回冒頭からやりましょう。」

「すみません。次はちゃんとやります。」

私は謝って、もう一度フルートを構える。

唇が、震えた。

私は、ショックを受けた。もう、震えがくることは、ないと思っていたのに——。すべての感情を押し殺して、私はブレスを取った。

休憩時間。なんとなく休憩所に行く気が起きず、フルートの席に座り続けていた私に、玲ちゃんが話しかけてきた。

「すっごい吹きやすかったです。どんどんリードしてくれるし、音も色々持ってるし……ほんと、勉強になりました。」

「いや、こちらこそ、だよ。玲ちゃんはいま、高一だっけ？」

「そうです。ママと東京に住んでて、吹部やりながら、レッスン通ってます。パパは仕事忙しいみたいで、山梨にひとりで住んでるんです。」

「そうなんだ。私も実家は東京なんだ。」

「パパから聞いてます。陽菜先輩、うちに指導してくださいよ。」

——高一、か。

そのころの私は、どんな演奏をしていたっけ。

音大受験のために、中学までやっていたブラスバンドをやめて、個人レッスン一本に絞ったところだった。楽しむためのフルートはもうやらないと、高校のブラスの誘いを蹴ったときに決意した。

でも、玲ちゃんは部活も真剣にやっているようだ。その上であれだけの演奏をして、しかも音大も目指している。私よりも、明らかに大きな器量を持っている。

「陽菜先輩は来年、どこを受験するんですか？」

それ以外の選択肢は、彼女の中には存在していないようだった。彼女が引いている（当然）のラインが、高い。

「やっぱり、藝大かな。」私は内心を隠しながら、呟いた。

「あー、やっぱりそうですね。陽菜先輩なら受かると思いますよ。先輩って、フルートだと誰が好きなんですか。」

「うーん色々好きな人がいて……どうしたの、ずいぶん聞くね。」

「こんな話ができる人がいなくて。私、メイエ様命なんですよ。」

確かに、玲ちゃんの柔らかく芯の強い音色は、フランスの名人、ポール・メイエを思いだす。

「メイエ様みたいなクラリネットを吹くのが夢なんです。」

ちよっとお茶買ってきます！　と言って、玲ちゃんが出ていく。音楽室がしんと静まり返った。

④ 静寂の中、私は膝の上に置いたフルートを手に取り、構えた。

リッププレートに当てた唇が、小刻みに震えている。

無理やりそのまま、音を出す。フルートから出る音はみつともなく震えたまま、発したそばから床のほうに落ちてしまう。私は、フルートを膝の上に戻した。カチカチと、歯が鳴った。

コンクールのことが、否応なく頭の中でリフレインする。玲ちゃんの、才氣溢れるクラリネットが、あの日のことを呼び覚ます。

私は、忘れていた。私が抱えている問題が、何ひとつ解決していないことを。

※ あのコンクールのあと——私は、必死に（個性）を探した。

※ パユを聴いた。

ランパルを聴いた。ゴールウェイを聴いた。ニコレを、ツエラーを、高木綾子を、有田正広を、ジャズのフルートから古楽の演奏まで、フルートを聴き続けた。そのどれもが素晴らしかった。それぞれに違った個性があつて、優劣がつけられなかった。私は玲ちゃんのように、メイエ様が一番と、無邪気に言うことができない。

——私には、嫌いなものがない。

ブラスバンド部の同級生は、プロの演奏に対しても嫌いだとか下手くそだとか、平気で言っていた。自分のことを棚に上げたそういう態度が私はすごく嫌だったけれど、もしかしたら、おかしいのは私のほうなのかもしれない。

嫌いなものがない。それは、好きなものがないことと同じではないか。

自分の音楽が、ないことと。

「陽菜せんぱーい。」

玲ちゃんを先頭に、休憩所にいたメンバーが帰ってくる。

「陽菜、玲の高校に教えにきてくれるんだって？　忙しいところ、悪いな。」

「え、ちよっと待ってください。私、そんなこと……。」

「陽菜先輩、きてくれないんですか？」

玲ちゃんが悪戯っぽく首をかしげる。可愛らしいけれど、こういうところは金森さんの娘だ。したたかさは、彼女の演奏ともつながっている気がする。強い音楽。強い個性。

「判ったよ。来年くらいに落ち着いたら、声かけて。」

「わーい。約束ですよ。」

嬉しそうに微笑んでくる彼女に向かって、私は無理やり笑顔を作った。

（逸木裕著『風を彩る怪物』による。一部省略がある。）

※アンサンブル……小人数の合奏。

※リフレイン……繰り返すこと。

※パユ……フルート奏者。以下、「ランパル」「ゴールウェイ」「ニコレ」「ツエラー」「高木

綾子あやこ「有田正広ありたまさひろ」も同じ。

問1 動悸どうきが、高鳴る。とありますが、このときの「私」の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア　玲ちゃんれいちゃんが吹くクラリネットの音からは、どんな音を出したいのか、どんな音楽を表現したいのかが伝わってくるので、より高いレベルの演奏ができるのではと、期待している。

イ音大を目指している高校一年生の玲ちゃんが、ぶれない意思が伝わってくるような力強いのに柔らかさもある美しい音でクラリネットを吹いているのを見て、心が乱されている。

ウ　玲ちゃんが吹くクラリネットの分厚く美しい音色に、細田^{ほそだ}さんたちが惹^ひかれていた様子を見て、玲ちゃんが新たなメンバーとして受け入れられていることをうれしく感じている。

工 ずしんと腹に響くような芯のある音でクラリネットを吹く玲ちゃんがまだ高校一年生だと知り、自分も早く目標に向かって進んでいかなければならないと、あせりを感じている。

問2 演奏の途中で、私は気づいた。とありますが、「私」はどのようなことに気づいたのですか。次の空欄にあてはまる内容を、三十五字以上、四十五字以内で書きなさい。(6点)

玲ちゃんが、

35

とらうこと。

45

③ 私には内心を隠しながら、つぶや呟いた。とありますが、「私」が隠した内心とはどのようなもので
すか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア フルートをまともに演奏できずに思い悩んでいる「私」とって、音大受験を（当然）と考えている玲ちゃんの間には、まだきちんと答えることができないという心情。

イ音大受験を目指す「私」にとって、志望校にくわえ、目標とする奏者まで明確にすることを〈当然〉とする玲ちゃんの考え方は、レベルが高くてついていけないという心情。

ウ　まだ音大受験をするかどうかで悩む「私」にとって、高校一年生の時点で志望校を決めて練習することを（当然）とする玲ちゃんの姿勢は、立派で尊敬に値するという心情。

工 音大受験のためにすべてを捨てた「私」にとって、部活とレッスンの両立を（当然）とする玲ちゃんの音楽への関わり方は、負担が重いので止めた方がいいという心情。

問4 リッププレートに当てた唇が、小刻みに震えている。とありますが、このとき「私」の唇が震えた理由を次のようにまとめました。空欄にあてはまる内容を、コンクール、個性の二つの言葉を使って、三十字以上、四十字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(7点)

[illegible]

問5 本文の内容や表現について述べた文として適切なものを、次のア～オの中から二つ選び、その記号を書きなさい。(5点)

ア「小柄な体格とは対照的に、ずしんと腹に響くような芯のある音を出す。」のように対句を用いて表現することで、比較された双方がより印象的に伝わるようになっていく。

イ「水が流れるような繊細さ」や、「精密機械のように正確にテンポをキープして」という比喻表現によって、演奏されている曲や演奏している状況がイメージしやすくなっている。

ウ 「バユを聴いた。」から「ニコレを、ツエラーを、たかぎあやこ高木綾子を、ありたまさひろ有田正広を」までの部分では、具体的な人物名を列挙し、「私」が様々な演奏を聴いたことが表現されている。

工 「したたかさは、彼女の演奏ともつながっている気がする。」という表現によって、「私」に對抗心を向ける玲ちゃんに、「私」が見下した態度で接していることを印象づけている。

才 本文は、作品中の登場人物である「私」が語り手となって展開しており、「無邪気に言うことができない。」のように、会話文以外でも「私」の思いや考えが表現されている。

2 次の各問いに答えなさい。(24点)

問1 次の1部の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。(各2点)

- (1) 友人に本当の気持ちを吐露する。
- (2) 資料の利用を許諾する。
- (3) 兄は仕事で外国に赴くことになった。
- (4) 小銭をサイフに入れる。
- (5) あの人は細かい点にまで目がトドク。

問2 次の――線部の述語に対する主語を、一文節で書き抜きなさい。(3点)

夏休み期間中は大会こそ行われないものの、練習試合などは数多く予定されているため、電車に乗る機会も普段よりは多いだろう。

問3 次のア～エの俳句について、表現されている季節が他の三つと異なるものを一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- ア 夏草や 兵どもが夢の跡
イ 荒海や佐渡によこたふ天河
ウ 五月雨をあつめて早し最上川
エ 閑かさや岩にしみ入る蝉の声

問4 中学生のAさんは、授業で「地元の商店街を紹介する」スピーチをするため、商店街の方にインタビューを行いました。次のインタビューの様子と、Aさんが書いた【メモ】を読んで、あとの問いに答えなさい。

インタビューの様子

Aさん「本日はありがとうございます。さっそくですが、この商店街の名物といえば何ですか。」

B店長「はい。この商店街の名物といえば、何といっても築百年をこえる時計塔です。大正時代の建築物であり、商店街の象徴です。遠方からわざわざ見にいらっしゃる方もいます。」

Aさん「なるほど。では次に、商店街にあるお店や商品についてのお話を聞かせてください。」

B店長「そうですね。この商店街は長い歴史があるため、伝統のあるお店がたくさんありますよ。特に通りの中心にあるパン店のあんパンは、五十年以上売れ続けている人気商品です。」

Aさん「それはすごいですね。わたしも以前食べましたが、すごくおいしかったです。何か特別な工夫があるのでしょうか。」

B店長「一度にたくさん作らずに、少ない数を一日に何度も焼き上げること、常に焼きたてを提供できるようにしているそうです。お店といえば他にも、人形店や呉服店など伝統的な品物を扱っている店舗や、若い人たちに人気のスポーツ用品店や洋菓子店など、商店街ならではの様々な専門店がありますよ。」

Aさん「色々なお店を回りながら、ぶらぶらと歩くだけでも楽しそうですね。」

B店長「そのとおりです。その場合は、地元の高校生がデザインした、商店街オリジナルの地図をおすすめしています。一枚どうぞ。」

Aさん「ありがとうございます。手書きのイラストやコメントがたくさん入っていて、とても見やすい地図ですね。これはどこで手に入れることができるのでしょうか。」

B店長「商店街の中にある案内所で散策用に配っていますよ。」

Aさん「わかりました。次に、商店街の今後の課題について教えてください。」

B店長「課題としては、商店街全体での一体感が少し足りないことでしょうか。また、一部の
お店では、技術を受け継ぐ若い世代の人がいないという問題があるようです。」

Aさん「それは、今後社会へと出ていく私たちにも関係のある問題ですね。」

B店長「そうですね。中学生のみなさんには、ぜひ色々な職業に興味をもって、調べたり体験
したりしてほしいと思います。」

Aさん「わかりました。学校でも伝えたいと思います。」

（インタビューが続く）

【メモ】

●商店街の名物

➡ 時計塔(大正時代の建築物)

●通りの中心にあるパン店

➡ 50年以上売れ続けているあんパン

➡ 常に焼きたてを提供

●人形店・呉服店(伝統)

●スポーツ用品店や洋菓子店(若い人に人気)

商店街オリジナルの地図

➡ 地元の高校生がデザイン

●課題①

商店街全体の一体感が不足 ➡ 商店街のお祭りを企画中

●課題②

一部のお店で、技術を継承する人がいない



色々な職業について、調べたり体験したりしてほしい

☆ 私たちにも無関係ではないので、何か
できることはないか、スピーチのまとめ
として考えておく。

(1) Aさんは、このインタビューにおいてどのような工夫をしていますか。最も適切なものを、
次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(2点)

ア 相手の緊張を緩和しこちらへの親しみをもってもらうため、敬語を使用せずに話す。
イ 相手の話題が質問の内容からそれてしまったときは、それを伝えて流れを修正する。
ウ 相手の回答を受けて、より詳しく聞きたい話題に対しさらに踏み込んだ質問をする。
エ 相手の話が一部聞き取れなかったときは、内容を復唱し正しいかどうかを確認する。

(2) ぶらぶらと歩く とありますが、同様の意味をもつ二字の熟語を、
から探し、書き抜きなさい。(3点)

(3) 【メモ】の内容には、
インタビューの様子

AさんはB店長にどのような質問をして、その情報を得たと考えられますか。質問文を考えて
書きなさい。(3点)

私はいま、白い直方体の真新しい消しゴムを持っている。この消しゴムは、「白い」、「直方体である」、「新しい」といった特徴を持っている。これらの特徴のことを、哲学では専ら「性質」と呼ぶ。

この「性質」こそが「普遍者」とも呼ばれてきたものだ。例えば、「白い」という性質は普遍者である。これに対して、これらの性質を担^{にな}っている消しゴムのようなものを「個物」ないし「個別者」と言う。「白い」という性質が普遍者だと言われるのは、これが消しゴム以外の全ての白いものに、「普遍的に」当てはまるからである。砂糖も、塩も、[※]ホワイトハウスも、「白い」という性質を共有している。「直方体である」についても同様だ。この本も、豆腐も、あなたが小学一年生のときに通った教室も、全て「直方体である」という性質を共有している。^①これに対して、個別者は一つしかない。白いものはたくさんあるのに対し、いま私が持っている白い消しゴムは一つしかない。ホワイトハウスも一つしかない。直方体であるものはたくさんあるが、あなたが小学一年生のときに通った教室は一つしかない。このような意味で、「白い」のような性質は普遍者(あるいは単に「普遍」)、特定の消しゴムのようなものは個別者(あるいは「個物」と呼ばれる)。

右のような仕方で普遍者と個別者を分けることは自然なことのように思える。しかしここから、西洋哲学史上最大の問題の一つが生まれてくる。それは、普遍者は本当に存在すると言えるのか、また、もし存在するとしたらどのような仕方で存在するのか、という問題だ。

私が持つ白い消しゴムは、明らかに存在する。しかし、この消しゴムが持つ白さ、すなわち「白い」^②という性質が存在すると言えるかどうかについては、判断することは難しいかもしれない。私たちは白い消しゴムや白い家を見たことがある。しかし、「白さ」そのもの、「白い」という性質そのものを見たことがある人など一人もない。私たちが見ているのは白い消しゴムであって、白さそのものではないのだ。

また、「白さ」が存在するとしたとき、それがどの場所にあるかもわからない。例えば私の消しゴムは私の家にあり、ホワイトハウスはアメリカのワシントンDCにある。私の家と、ホワイトハウスの両方に、そしてその他の白いものがある全ての場所に、同じ「白さ」が存在するのだろうか。このように考えると、「白い」という性質、普遍者が存在するとは考えるのは、かなり具合の悪いことだと感じられてくる。

しかし、「白さ」が存在しないと考えると都合が悪くなる場面もある。例えば、私の消しゴムとホワイトハウスはどちらも「白い」という性質を共有していると考えられる。だからこそどちらも白いと言われる。ここで、「白い」という性質が存在しないとしたらどうなるだろうか。私の消しゴムとホワイトハウスが共通して持つものなど何もない、ということになるだろう。それではなぜ、何も共通するところのない私の消しゴムとホワイトハウスがどちらも「白い」と呼ばれることになるのだろうか。「私の消しゴムも、ホワイトハウスも、同じ白という色を持っている」という、当たり前前に思われた事実が、説明不可能になってしまわないだろうか。

^③この問題を回避するには、「白さ」そのものが存在するとは考えた方が都合がよい。「白さ」そのものの、すなわち「白い」という性質がもし存在するなら、「私の消しゴムとホワイトハウスはどちらも(白い)という性質を共有している」という文を、文字通りの事実として認めることができるようになる。

[※]ヘーゲルも、「本当は何が存在するのか」や、「そもそも何が存在するとはどういうことなのか」

という存在論の問いを、哲学の最も重要な課題だと考えていた。ヘーゲルはこの問いに、「他のものと区別されているときである」という独特の答えを提示している。

ヘーゲルは「そこにある」ものを考えるにあたって、そこにあるものが輪郭を持っているということとを重視する。

再び消しゴムについて考えてみよう。机の上に乗っている消しゴムには輪郭がある。輪郭によって、消しゴムは消しゴムでないものと区別される。消しゴムの輪郭は、消しゴムが載っている机と消しゴムを隔てる。また、消しゴムの周りの何もない空間と消しゴムを隔てる。こうして輪郭によって周囲のものや空間と区別されることで、消しゴムというものの在り方が定まる。そしてこれによって、消しゴムは現に、そこに存在することができている。

ここで重要なのは、何かが存在しているときには必ず、そのものは他のものと区別されている、ということである。現に存在するものは、輪郭を持つ。輪郭を持つということは、周囲と隔てられているということである。周囲と隔てられていることはつまり、周囲のものや空間と区別されているということだ。^④何かが存在するという事態を捉えるためには、そのもの以外のものに目を向ける必要がある。それ以外の、他のものと区別されることで、そのものは存在している。

何かの在り方を定め、それによってそのものを存在させるような区別は、空間的なものばかりではない。空間的でない区別も、ものを存在させている。

例えば、消しゴムは鉛筆ではない。机でもない。修正液でもなければ、輪ゴムでもない。また、白い消しゴムは、黒い消しゴムではない。直方体の消しゴムは、丸い消しゴムではない。このように、それが何であるのか、そしてどのような特徴を持つのかということに関しても、存在するものは、他のものと区別されている。この区別がなければ、「白い直方体の消しゴム」が存在するとは言えないだろう。

ここで「白い直方体の消しゴム」の存在を可能にしている区別は、輪郭による空間的な区別ではない。そうではなくて、「消しゴム」や「鉛筆」、「修正液」、あるいは「白」や「黒」といった性質に関わる、概念的な区別である。概念的に区別されることで、「白い直方体の消しゴム」は存在する。

重要なのは、何かが存在するということと、そのものが他のものから概念的に区別されているということとが、切り離せないということだ。前に見た輪郭による空間的な区別だけでなく、概念的な区別もまた、何かが存在するということを成立させている。

空間的な区別は、輪郭で区切ることによって、個物を存在させている。これに対して、概念的な区別は、輪郭を持たない普遍者をも存在させていると考えることができる。

例として、「白い」という性質を取り上げる。白という色は、黒や赤といった白以外の色から区別されている。このことよって、「白い」という性質は存在することができている。

色以外の性質についても考えよう。「直方体である」という性質は、「球である」「三角錐である」といった性質から区別されることによって存在している。

このように、多くの個物や普遍者について、存在するということは、他と区別されているということと不可分である。

（川瀬和也著『ヘーゲル哲学に学ぶ 考え抜く力』による。一部省略がある。）

（注） ※ホワイトハウス……アメリカ合衆国の大統領官邸。白色の外観からこのように呼ばれる。

※ヘーゲル……ドイツの哲学者。（一七七〇～一八三二）

問4 ④ 何かが存在するという事態を捉えるためには、そのもの以外のものに目を向ける必要がある。とありますが、その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア そのものの在り方が定められることで、初めて輪郭を持つことが可能となるので、現に存在する同じ在り方をしている他のものを参考にして在り方を定める必要があるから。
- イ そのものは単独では存在することができず、そのものの在り方が定まり存在できるようにするために、そのものから隔てられ区別された他のものが必要不可欠であるから。
- ウ そのものの輪郭の持ち方が、そのものが単独で存在できるかできないかを決めることになるので、他のものがどのような輪郭を持っているのか比較することが求められるから。
- エ そのものは単独で存在することができず、他のものとどのような関係で空間に存在しているかを見ないと、そのものが存在する場所を正しく認識することができないから。

問5 本文で述べられた「ものの存在の仕方」について、次のようにまとめました。空欄 、

Ⅱ にあてはまる内容を、それぞれ十字以上、十五字以内で書きなさい。(7点)

個物は

Ⅰ

ことで存在するのに対し、普遍者は

Ⅱ

ことで存在する。

4

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)(12点)

今はむかし、物ごと自慢くさは未練のゆへなり。物の上手の上からは、すこしも自慢はせぬ
どんなことでも
 やたらに自慢したがる

事也。我より手上の者ども、広き天下にいかほどもあるなり。諸芸ばかりに限らず、侍道にも
技量がすぐれている

武辺・口上以下、さらに自慢はならぬものを、今の世は、貴賤上下それぞれに自慢して、声高に
武芸・弁舌
 まったく

荒言はきちらし、わがままをする者多し。その癖に、をのれが疵をかくさんとして、よき者を
偉そうなこと
 隠そう

誹り笑ふ事あり。ある者、座敷をたてて絵を描かする。白鷺の①一色を望む。絵描き、
非難し
 座敷を作つてふすまに 白鷺だけを描くこと

「心得たり。」とて焼筆をあつる。亭主のいはく、「いづれも良ささうなれども、此白鷺の
※やきかて
 焼筆で下絵を描いた

飛びあがりたる、羽づかひがかやうでは、飛ばれまい。」といふ。絵描きのいはく、「いやいや
②は

此飛びやうが第一の出来物ぢや。」といふうちに、本の白鷺が四五羽うちつれて飛ぶ。
③で きもの
 飛び方 本当の

亭主これを見て、「あれ見給へ。あのやうに描きたいものぢや。」といへば、絵描きこれを見て、

「いやいやあの羽づかひではあつてこそ、それがしが描いたやうには、得飛ぶまい。」といふた。
飛ぶことはできまい

『浮世物語』による。

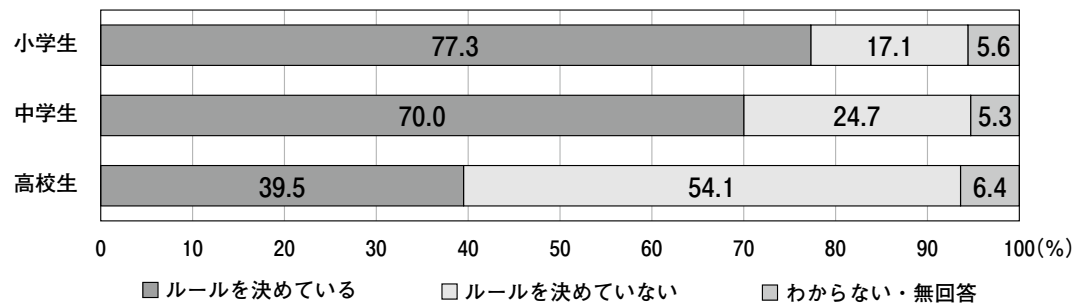
(注) ※焼筆……細長い木の端を焼きこがして作った筆。

次の資料は、内閣府が行ったインターネットの利用についての調査結果のうち、「インターネットを利用している」と答えた満十歳から満十七歳の回答をまとめたものです。

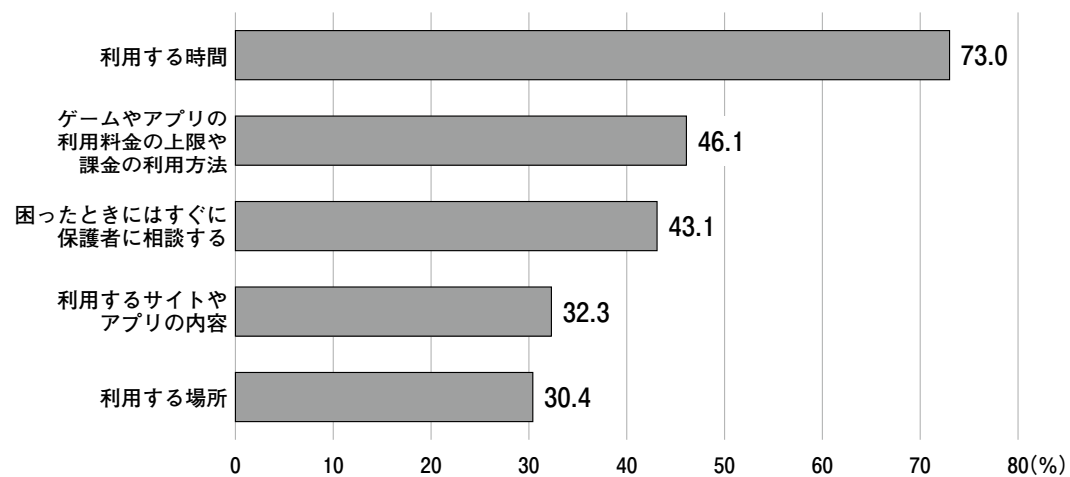
国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「インターネットの適切な利用」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの（注意）に従って、あなたの考えを書きなさい。（12点）

資料

① インターネットの使い方について、何か家庭でルールを決めていますか



② あなたの家庭で決めている「インターネットの使い方のルール」にあてはまるものは？ ※複数回答



内閣府 令和3年度「青少年のインターネット利用環境実態調査」より作成

（注意）

- (1) 二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

（以上で問題は終わります。）

